「ジャポニスムについて」 Copyright：Takumin

ジャポニスムは一般に、浮世絵などが与えた絵画の印象派に対する影響として知られているが、実際にはそれだけにはとどまらず、建築、ファッション、文学など美術といった様々な分野において、19 世紀後半に日本美術が西欧に与えた影響の事を指す。ジャポニスムがどのように西欧社会に影響を及ぼしたのか、そしてジャポニスムが明らかにした、自然に対する西欧と日本のそれぞれの考え方の相違について、そして最後に、どのようにしてジャポニスムとは成立したのか、以上の3点について着目しながら述べてゆこうと思う。

まず、ジャポニスムが西欧芸術に与えた影響を考えるために、ジャポニスムが芸術家に浸透してゆく様子を確認しながら両者を比較してゆきたい。西欧芸術では、19世紀中頃まで、遠近法、肉付け法、明暗法などの表現方法が中心であった。そして、芸術とは日常生活から完全に切り離されたものであり、「芸術のための芸術」を原理とする「芸術至上主義」の思想が圧倒的であった。そのため、彫刻や絵画、建築といったものは「純粋芸術・大芸術」、生活美術である工芸は「応用芸術・小芸術」というように、はっきりと区別されていた。もちろんランクとしては後者の工芸が低く見られていて、この固定観念的な芸術観は現在でも消えてはいないという。また西欧は古代ギリシア文明以来の「人間中心主義」であり、自然は征服すべき対象であったため、絵画における主役も当然人間であった。動物や植物などの自然が描かれる場合、何らかの意味を表す「象徴」としてでしかなかった。自然と人間は相対するものであり、人間の能力を以てすれば自然は征服できるという考えが西欧芸術の根底にはある。西欧社会では自然をいかに博物学的に捉え分類するかに焦点が当てられた。そのおかげで、合理性や形式を重んじた西欧は、体系的な芸術論を創り出すことができたのである。
一方、日本美術は日常生活と切り離されたり区別されたりするものではなく、生活の中から生まれた生活美術であった。日本においては、自然を博物学的に捉え分類するといった西欧的な思考は一切考えられず、自然史・自然科学といった概念は生まれることがなかった。日本はありのままの自然とともに芸術を発展させてきたのである。そして、日本美術は不完全な表現の中にその美意識を感じることができる。俳句や短歌といった文学からもその不完全さからくる美を感じ取ることが出来るであろう。この「不完全不均等の美意識」が日本の芸術の中枢、そして日本人の美の根底を占めているのである。表現を最小限におさえることで、より多くのものを表し感じさせようとする。西欧芸術では未完成と見なされてしまうような美の概念が、日本の伝統芸術には息づいているのである。あくまで自然は自然であり、そして共生し合うべきものであり、そこには秩序・体系といった学問的なものは一切存在しなかったことが見てわかるだろう。

日本には「自然の中で共に生きる」という価値観が存在し、ヨーロッパには「自然を学術的対象として捉える」という伝統思想が存在する。参考程度に、物理学者の森永晴彦氏が非常に興味深いことを述べていたので紹介したい。「りんごの落下を見てニュートンが科学をつくり出したのに、日本人なら詩を作る。」この言葉に表象されるように、日本とヨーロッパでは自然に対する思考が

根本的に異なるのだ、ということをここで確認しておきたい。

次に、ジャポニスムが芸術家に与えた影響について考えたい。時は浮世絵の江戸時代からはさかのぼるが、浮世絵への発展要素を備えていたと思われる大和絵が形成された平安時代、栄華を極めた藤原貴族の美学には、「うつろいやすさ、瞬間のはかなさ、生成を愛好し、理性よりも感情を重んずる」というロマン主義の美学と通ずるものがあったという。当時近代化を目の前に芸術家達は新しい道を模索し始めていた。そこで注目されたのが日本の芸術の構図なのである。特に浮世絵は、芸術家達に大きな影響を及ぼし、新しい視点を与えた。浮世絵の特徴である対象物の一部の拡大や切り取ったような大胆な構図は、西洋美術のリアリズムを追求する姿勢とは対照的であった。色彩や光の表現という点においてもその明るさは西欧にはないものであった。あくまで三次元的な精密さを求めていた西欧に対し、平面的でありながら躍動感にあふれる日本美術は芸術家たちを驚かし、また魅了したのである。この時期に浮世絵等に影響を受けたと言われる画家は多く存在する。その中でも日本人によく知られており今日でも高い人気を保持しているのは、マネ、モネ、ドガ、ゴッホ、セザンヌ、ロートレックといった画家達であろう。また、工芸品のデザイン性においても日本の美術は優れていた。これらは西欧芸術に新しい表現方法を提示したのである。このように、指標を失い、時代の潮流への反動が続く近代社会という絶妙なタイミングをもって、日本美術はそれまでのヨーロッパにはない視点とかたちを備えて現れた。ジャポニスムは、様々な思想が混在した西欧社会に、彼らの進むべき方向性を改めて示したのである。
ここで、ジャポニスムから生じた「新芸術」として一つ取り上げておきたいものがある。1890 年代から、フランスにおいて絵画に加えてポスターや版画などの装飾的な、日本美術の影響を非常に受けているデザイン様式が成立した。その名も「アール・ヌーヴォー」である。「アール・ヌーヴォー」は 19 世紀末に興ったデザイン思潮であり、植物の枝や蔓のような流動的な曲線の模様や、植物・昆虫などの自然のモチーフが多用されているのがその特徴である。繊細なガラス工芸で有名なエミール・ガレも、日本の自然主義的モチーフを多用している。桜、梅や蝶、鯉、蛙といった、西欧では珍しいものまで彼の作品には見られた。「アール・ヌーヴォー」という名は、ジークフリート・ビングのパリの店「アール・ヌーヴォー」に由来するという。これは、日本美術を扱う店と隣接した、東洋美術を中心に扱う総合デザインのギャラリーである。画商であり評論家であり、また雑誌編集者でもあったビングは『ル・ジャポン・アルティスティック』(芸術の日本)という日本美術のさまざまなジャンルを詳しく説明し、さらに図版も多く掲載された豪華な雑誌を、仏語、独語、英語で 1888 年から 1891 年まで刊行している。その他にもビングは日本美術の紹介にかなり貢献しているとあり、彼がジャポニスム流行の大きな担い手の一人であったのではないかと思う。
1900 年のパリ万国博覧会が「アール・ヌーヴォー」の絶頂期であった。アール・ヌーヴォーは、ドイツ、オーストリアでは「ユーゲント・シュティール」、イギリスでは「グラスゴー・スタイル」などと名前を変えてヨーロッパ全土に普及したという。ここでやっと市民たちの室内から発する総合的なデザインが確立したのである。ジャポニスムはこの新様式誕生のための最後の、そして決定的な要因だったが、それもやがてこれに溶け込んで表面的には見えにくくなっていった。長い時を経て、よう

やくヨーロッパにおいて再び「様式」が成立したのである。そして、過剰なまでにヨーロッパに広がった装飾様式もやがては衰退し、1910 年以降、装飾性を排除し合理性を追求したモダニズム・近代デザインの時代が始まったのである。

最後に、ジャポニスムはどのようにして誕生したのかを考えてみたい。今までジャポニスムを既存のものとして考えてきたが、そもそもジャポニスムという一連の流れはどのようにして生まれていったのだろうか。そしてジャポニスムは文化という観点からはどのような意義があったと言えるのだろうか。これらを述べてまとめとしたい。
ジャポニスムの根源は、17 世紀末から 18 世紀にかけての間だと考えられている。この時期ヨーロッパは、他大国と並んで帝国主義の立場をとり、世界各地に植民地を作り、占領していた。その植民地政策によってアジア諸国の文化を知ることとなる。異文化のエキゾチックさを求めた西欧人は、特に中国の陶磁器や工芸品、絹織物、家具、中国式庭園などを生活に取り入れるようになった。これらの東洋文化は貴族階級や富裕層を中心にヨーロッパ全土でたいへんなブームとなった。この流行のことを「シノワズリー」、または「中国趣味」という。
ヨーロッパの伝統的様式とは全くもって異なる中国の装飾や色調が、バロック様式・ロココ様式といった旧様式に飽き飽きし、新たなる流行・新鮮さを求めていた人々を魅了したのだった。陶磁器においても、当時のヨーロッパの技術では造ることのできない高度な技術をアジア諸国が持っており、それがまた西欧人の心を魅了する後押しとなった。当時の貴族や富裕層にとって、中国趣味を取り入れることは一種のステータスを表すことをも見なされていたのである。ちなみに、日本の代表的な工芸品である漆器なども「中国趣味」の一部と捉えられ、オランダ東インド会社によって西欧に輸入されることになったが、その精密さや質の高さという点で中国のものを凌駕しているとして、ヨーロッパの王侯や貴族たちに重宝されることもあったという。
しかし、純粋に東洋文化が西欧人に受け入れられたわけではなかった。西欧人が東洋に対して持つ潜在的なイメージに合致するように敢えて手を加えるという、「都合のいい東洋文化」であった。
その後「中国趣味」は、単なる「異国趣味のブーム」という壁を破ることが出来ず、また、中国の内乱によって輸入が不可能になってしまったこと、アヘン戦争などで中国のイメージが低下したことも相まって、衰退していった。
時は過ぎ、1855 年の第3回パリ万国博覧会においてオランダの展示部門から日本の物産や工芸品が紹介された後、開国後の1867 年、第4回パリ万博に幕府は初めて正式に参加した。幕府、薩摩藩、佐賀藩、民間がそれぞれ独自に出品したので日本文化や生活の紹介として統一されたものではなかったものの、このパリ万博は西欧人の心に火を放ち、日本ブームを巻き起こした。さらに、外交官などの特権階級の外国人達が日本を訪れ、体験した日本文化を書物に書き記し日本文化を広く伝えようとした。日本美術の収集にも力をいれ、多くの美術品が海を渡っていったのである。
明治時代に入った 1868 年、新政府は近代化の一環として、浮世絵など西欧人に受け入れられる

ような日本美術に着目し、西欧市場にこのような工芸品を大量に輸出した。1870 年以降、輸出はこれまでの最高を記録するまでに増大し、パリ市場は日本の芸術品で溢れることとなった。1873 年のウィーン万博において日本人の生活様式や文化は広く紹介され、そして 1878 年のパリ万博でジャポニスムの熱狂は頂点に達したのである。このようにして、ジャポニスムは「中国趣味」をその発端とし、パリ万博をきっかけに爆発したのである。

ではジャポニスムという現象・風潮を通じてどのような意義があったといえるのか。19 世紀、産業革命が起こり近代化を進めてきた西欧諸国は芸術の分野において、芸術のあり方、さらには人間と自然とのあり方について考え直す一種の分岐点に立っていたのだと思う。殖産興業振興のためヨーロッパへ輸出された浮世絵や工芸品は、元は庶民にとっての美術であった。ヨーロッパに受け入れられモデルとなったのは庶民の間の生活美術であり、権力者や上流階級のための芸術ではなかったのである。ジャポニスムの影響によって「庶民のための芸術」という思考が権力者や上流階級も含め、西洋社会の中に広がり定着したというのは非常に興味深いことであると思う。

一方で、開国を迫られた側の日本は近代化に向けて工業化を進め、西洋諸国に近づこうと次々と西洋文化を取り入れるために惜しみない努力をした結果、皮肉なことではあるが西欧が熱狂していた当初の日本の姿からは遠くなっていってしまった。しかしその反面、日本は他国に目を向けることによって自国を客観的に見つめるようにもなり、改めて自国の文化とその良さを発見・再確認することにつながったのもまた事実であることを挙げておきたい。

どの国にもどの時代にも、他文化の影響は見て取ることができるであろう。シルクロードを渡り、様々な文化が行き交ったことは言うまでもない。ジャポニスムの元といえる日本でさえも中国の唐絵や浮世絵の遠近法的表現など、文化的に受けた影響は計り知れない。そのなかで、19 世紀に起こった「ジャポニスム」という他文化受容の現象は、異文化交流の増加する現代にとっても良い指針となるのではないだろうか。また、「ジャポニスム」は相手の文化のよさを新しい視点として自国の文化の中に取り込み、上手く体現させてゆくことを実証した好例であると思う。